

# カモのくる村

村山 宏著 富永秀夫絵



# カモのくる村

村山 宏



Tom: i

913.6 村 山 宏

カモのくる村

新日本出版社 1971

174p 21.5cm (新日本創作少年少女文学10)

むら やま ひろし  
村 山 宏

1934年、山形市生まれ。山形県立楯岡高等学校卒業後、法政大学で日本文学を学ぶ。1960年より科学教育研究協議会の『理科教室』を編集。

日本児童文学者協会、児童文化の会会員。

おもな著書「灯をつぐ子ら」(理論社)「あたらしい児童文学の創造」(共著・評論社)。

とみ なが ひで お  
富 永 秀 夫

1924年、東京生まれ。児童出版美術家連盟会員、童画集団同人。絵本、童話のさし絵等に執筆、童画会賞2回受賞。

おもな作品「くじらのなみだ」(フレーベル館)「ふくろねずみのビリーおじさん」(金の星社)。

新日本創作少年少女文学10 カモのくる村

1971年6月20日 第1刷発行

1976年5月25日 第3刷

著 者 村 山 宏

画 家 富 永 秀 夫

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 112 東京都文京区大塚3-3-1

発行所 株式会社 新日本出版社

電 話 (945) 8511 振替 東京3-13681

印刷 鎌倉印刷株式会社・製本 古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

\*もぐじ



はじめに 5

1 夏休みがおわったら日本は…… 8

2 峠<sup>とうげ</sup>をこえてきたアメリカ軍 41

3 ピアノなしでもつていくんだあ！ 63

4 わたり鳥 75

5 ことしからカモトリ衆<sup>しゅう</sup>のなかまに 92

6 カモがやられたあ！ 111

7 ぼくらの連判状<sup>れんはんしやう</sup> 125

8 カモ沼<sup>ぬま</sup>を守れ 142

9 「アメリカ軍といえども立入禁止<sup>たちいりきんし</sup>」 161

あとがき

172





装丁・さし絵

富とみ 永なが  
秀ひで  
夫お

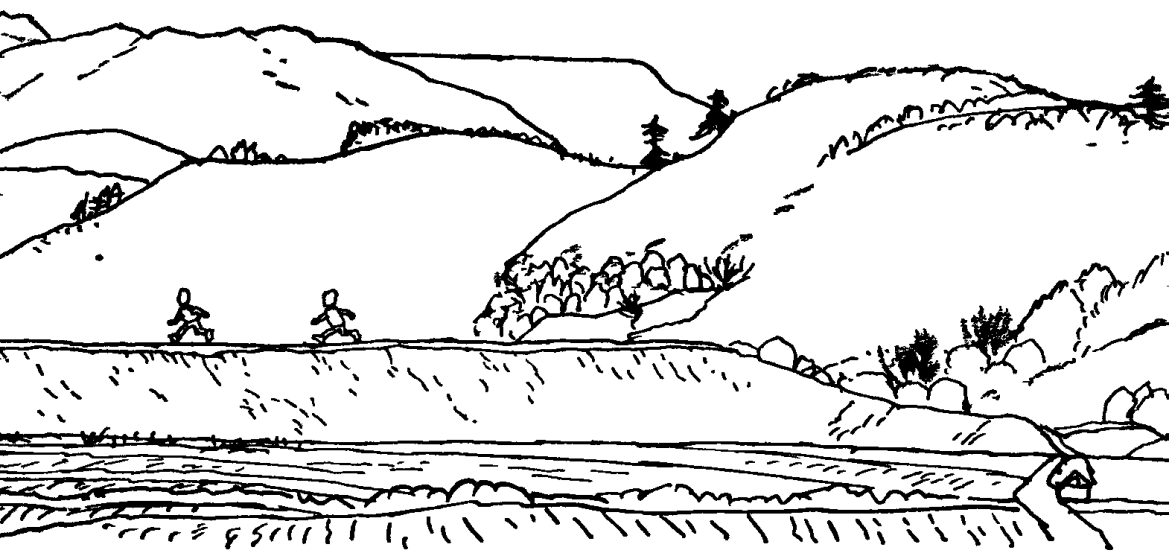


## はじめに

日本の東北地方には、北にむかつてのびていく、二列の山脈さんみやくがあります。

そのひとつは、東北の背骨せほねといわれている、津軽つがるの海にまでのびていく、奥羽山脈おつうさんみやくです。もうひとつは、日本の屋根といわれている日本アルプスから、日本海がわをのびていく越後山脈えちごさんみやくの延長上にある出羽丘陵でわきゅうりやうです。

奥羽山脈のみねづたいには、標高ひょうこう一八四一メートルの蔵王熊野岳ざおうくまのだけがそびえ、その北となりには、一二六四メートルの面白山おもしろやまがつづいています。



日本海がわの、出羽丘陵<sup>でわきゅうりょう</sup>には、一八七〇メートルの朝日岳<sup>あさひだけ</sup>につ  
づいて一九八〇メートルの月山<sup>がつさん</sup>がそびえています。このふたつの山  
脈にかこまれてひろがる盆地<sup>ぼんち</sup>が、山形県<sup>やまがつけん</sup>の村山盆地<sup>むらやまぼんち</sup>とよばれている  
ところです。

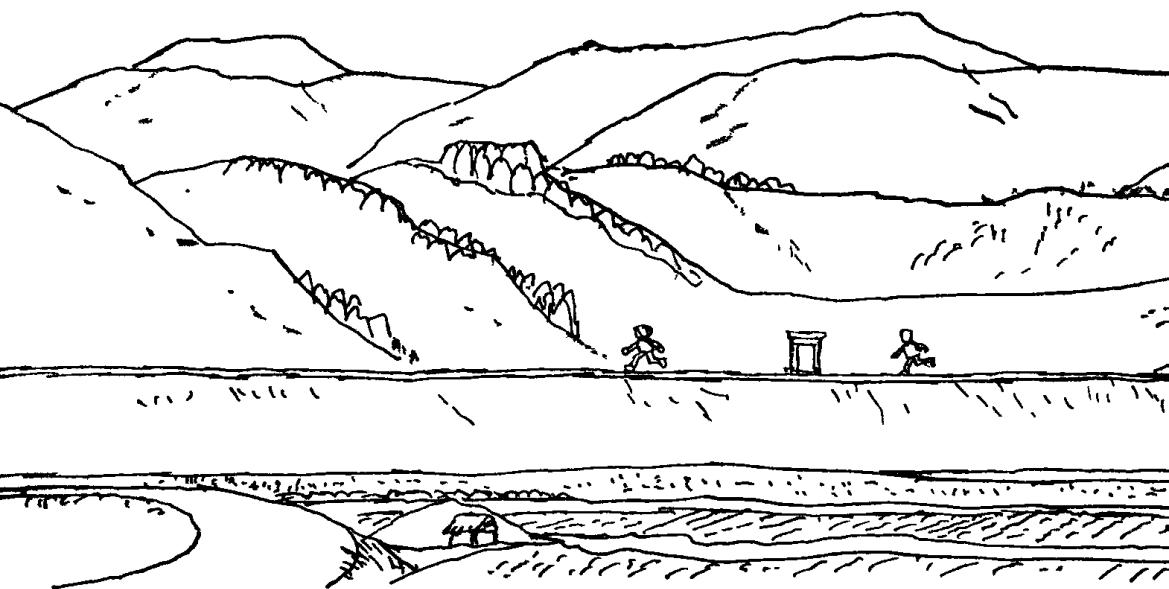
これからはじめる、わたしのお話は、奥羽山脈<sup>おううさんみやく</sup>のなかにある面白<sup>おもしろ</sup>  
山のそのまた下にある九〇〇メートルの雨呼山<sup>あめよびやま</sup>のすそ野にひろが  
る、小さい村におこったお話です。

この小さい村<sup>はらのさきむら</sup>〈原野崎村〉には、一五〇年も昔から、毎年、毎  
年、かかさずに野生<sup>やせい</sup>のカモがとんでくる沼<sup>ぬま</sup>があるのです。

カモたちは、遠い、北極<sup>ほつきよく</sup>に近いシベリヤから、サハリン半島にそ  
って日本の国にわたってくるのです。

つばさは

サハリンの山脈にそってすすむ



宗谷海峡をこえ

平野を二つにきって蛇行する

石狩川をわたり

津軽の海を

ひとつとびにこえてきた

つばさ

カモたちは、こうして、国境のない空をとんでくるのです。

〈原野崎村〉には、どんな事件が、まきおこるのでしょうか。

元気な、村の子どもたちに、声援をおくってください。

それでは、「カモのくる村」のお話をはじめます。



# 1 夏休みがおわったら日本は……

「しまった！」

原野崎はらのさき小学校の校門から、げた箱げたばこのならんでいる玄関げんかんにはしりこんで、茂樹しげは、おもわず頭に手をやった。

ながい夏休みがおわった第一日目だ。

いきおいよく校門にかけこんで、〃奉安殿ほうあんでん〃をちらりと見た。走りながら、ペコリと頭だけはさげたのだから、

そのまま、いつきにかけてきたのだ。

首ねっこをカメのようにちぢめて、ななめうしろの職員室しんしつの窓まどに目をやった。どこからも、どなる声がとんで

1 夏休みがおわったら日本は……

こない。

「……へんだな？」

天皇陛下<sup>てんのうへいか</sup>の写真と、教育勅語<sup>きょういくちよくご</sup>がはいっている奉安殿は、校門からはいったすぐ東がわの、プールのような池のむこうの、木立<sup>ちだち</sup>のなかにたっていた。登校してくる生徒も先生も、それにむかって、ぼろしをぬぎ、ふかく腰<sup>こし</sup>をまけた最敬礼<sup>さいけいれい</sup>をしなくてはならないきまりだ。

茂樹は、奉安殿の前を走りぬけるのが得意<sup>とくい</sup>だが、三日に一度は、ハゲ校長のどなり声を頭からあびて、ぴくっと立ちどまってしまふのだ。

ハゲ校長はいったい、どこから、どうして見はっているのだろうか。

「えいっ！ このまま、にげてやれ！」

茂樹は、ぞうりの足をけて、げた箱のならんでいる、入り口にとびこんだ。

夏休みのおわった最初<sup>さいしよ</sup>の日の教室は、ざわざわとおちつきがなく、そうぞうしい。鼻<sup>はな</sup>のあたまの皮<sup>かわ</sup>がむけてしまい、まっくろに日やけた勇三<sup>ゆうぞう</sup>が、まっ先に走りよってきた。

「シゲ……どうした。はちまきなどして。」

「うん……目かくしの鬼ごっこで、入谷橋のコンクリートのらんかんにつっこんでよ、ひたいが、パクリと口をあけたんだ。」

てれわらいをしながら、茂樹はいった。

「バカだな。自分でつつこんで、ひたいをきるなんてな。」

のつぽの勝男が、よこから見おろしていった。

「しかたなかったんだ……目かくしだろ。コンクリートのらんかにゲキトノしたんだもの。」

茂樹は、キズのうえを、にぎりこぶしで、トントンとたたきながらいった。なおりかけのキズ口は、むずむずとかゆくってしょうがない。

「きたぞ、きたぞ、〃玄米パン〃がきたぞ。」

五年二組の教室が、ざわざわと動いて、さっとしずかになった。玄米パンのように、ぷつくりとほつぺたがふくらんで、目のほそい美戸部礼子先生が、黒板の前に立った。

この三月に町の女学校を卒業したばかりの十八才になったおねえさん先生だ。しまもようをした木綿のもんぺのひもを、両手でいじりながら、にこにこわらっている。

「みんな、元気だった？ ……夏休みもおわりましたね。八月十五日をさかいにして、日本は新しい

1 夏休みがおわったら日本は……

国に生まれかわったのです。今までの日本の国は、軍国主義ぐんこくしゆぎといって、兵隊へいたいさんが政治せいじをやっている。その兵隊へいたいさんたちが太平洋戦争たいへいようせんそうというまったく勝ちめのない戦争を五年間もつづけてきたんです。こんど、日本が、アメリカ、イギリス、ソビエト、中国などの連合軍れんごうぐんに無条件降伏むじようけんこうふくをしたことは、もうみんな知っているわね。」

にこにこわらいつづけて、玄米パンがいった。

「これからは、民主主義みんしゆしゆぎの国、文化国家ぶんかこくかの建設けんせつのため、しっかりと勉強めいけんしなくつちやならないんです。これは、いま校長先生から聞いてきたばかりの話ですけど……ふ、ふ、ふ。」

戦争に負けた日本の、夏休みのおわった第一日目は、なにごともなくすすんでいった。

「……それからね、きょうから、奉安殿ほうあんでんには最敬礼さいけいれいをしてはいけなくなりました。雨天体操場うてんたいそうじやうの神かみだなをおがんでもいけないんです。もちろん日の丸の旗はたをたてるのも禁止きんしです。」

玄米パンはつけくわえていった。

「戦争に勝つようと、毎日おがんでも、やくにたたなかつたから……おがむのやめにすんのかあ。」  
助三すけぞうが、立ちあがっていった。

「まだ、天皇陛下てんのうへいか下の写真、あるんだべ？」

勝男がいった。

「いいえ……お写真と教育勅語は、校長先生が、郡役所にもっていつてしまいました。やいてしまうそうです。」

すました顔で玄米パンはいった。

「なあーんだあ。やいても、バチもあたらないものに、どうして、毎日、毎日おがませたのや先生？戦争に勝つようになって……。バカクサイことしたもんだな、おらたちは……。」

五平が、とんきような声をだしていった。

「カラッポになった神だなに、頭さげても、しょうないな。」

助三が五平の顔を見ていった。

「おら、最敬礼のしなおしを、何十回やらされたかわからないな。こんどから、最敬礼をしては、ダメだなんてソソした。いじはって、最敬礼をつづけたら、またしかられるんだべが？」

茂樹が、玄米パンにくいついた。

「そうでしょうね。きつとそうよ。シゲさん。でも、奉安殿に最敬礼をさせたり、日の丸の旗をたてたりしたら、こんどは校長先生がしかられて、クビになるんですってよ。」



「へえっ、校長先生は、だれからしかれんだ。」

助三すけぞうがいった。

玄米げんまいパンは頭をかたむけて困こまりきった顔になった。

「さあ……文部大臣もんぶだいじんかな……それともマッカーサーかな。先生もわからないわ。」

ペロリとしたをだして、玄米パンは首をちぢめた。

「そんなじゃ、校長先生も、これから、えばれなくなるだべ……ウヘッ。」

助三が、教室をぐるりとみわたして、とくいのだんごっぱなをふくらました。

どうりで、雨の日も、風の日も、校長室の窓をガラリとあけたまま、奉安殿ほうあんどんに最敬礼をしない子どもたちをみはっていた。＼どなり声＼が、きょうからやめになったというわけに、茂樹しげきは、いま気がついた。そして、最敬礼のしなおしを何十回も命令した、ハゲ校長が、いま、どんな気持ちで、どんな顔をしているのだろうと考えた……校長室の窓をピタノとしめきったなかで、つるつるに光る頭をガラリとかきむしっているにちがいない——と茂樹は思った。そう思うと、おかしさがこみあげてきて、「フッフ」フッフと、ひとりでにわらい声もれてきた。